

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：52605

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12998

研究課題名（和文）戦後児童出版メディアにおける「童話」の編成 戦前・戦中期との関わりから

研究課題名（英文）The Formation of "fairy tales" in the Postwar Children's Publishing Media: In Relation to the Prewar and Midwar Periods

研究代表者

宮田 航平（MIYATA, Kohei）

東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・准教授

研究者番号：50802203

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、第二次世界大戦後に児童向け読み物が掲載された雑誌・叢書を対象として、戦後の児童文学が戦前・戦中期の「童話」を再編成していく過程について、児童出版メディアという観点から調査・分析したものである。1950年代に展開された「童話伝統批判」に注目が集まる一方で、戦後の児童出版メディアにおいて坪田譲治や与田準一らが果たした役割は大変重要であり、「童話の系譜」にも位置づけられる「あまんきみこ」の出発期をも準備し、支えてきたことを明らかにした。また、あまんの作品の特質や変遷についても多角的に考察することで、現在まで続く児童出版メディアを問題化するための論点を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「童話／現代児童文学」という二項対立的な図式で把握されることが多かった戦後の児童文学状況について、児童出版メディアという観点から「童話の系譜」を捉え直すことにより、雑誌・叢書等を含めてより精緻に考察することができたのは、本研究の大きな学術的意義と言える。また、小学校国語教科書などで重要な位置が与えられており、現在まで多くの子どもに読まれているあまんきみこの作品の特質について多角的に考察したことは、児童出版メディアのみならず、国語教育について考えるための基盤として社会的意義も有する。

研究成果の概要（英文）：This study investigates and analyzes the process where the postwar children's literature reformed the "fairy tales" before and during World War II, from the perspective of children's publishing media, focusing on postwar magazines and series that carried reading materials for children. While much attention has been paid to the "criticism of the fairy tale tradition" developed in the 1950s, TSUBOTA Joji, YODA Junichi and others played an important part in the postwar children's publishing media. This study reveals that they provided the basis for the starting period of "AMAN Kimiko," who is also positioned in the "fairy tale genealogy." By examining the characteristics and transition of AMAN Kimiko's works from various perspectives, this study identifies contemporary issues of the children's publishing media.

研究分野：児童文学

キーワード：児童文学 日本文学 メディア 出版文化 国語教育 保育

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、戦前・戦中期、そして戦後の児童文学を対象として、文学研究の観点から研究活動を行ってきた。特に本研究を開始するまでの数年間は、戦後の評論や研究がほとんど等閑視してきた「童話」について、童話作家であるあまんきみこの作品と児童出版メディアとの関わりから考察を深めてきた。

戦後の児童文学は、戦争への反省から新たな作品を生み出そうと模索してきたが、当初は戦前・戦中との強い連続性を持つものであった。戦後直後に次々と創刊される所謂「良心的児童雑誌」に名を連ねたのは、戦前・戦中期に作品を発表してきた童話作家たちが中心であり、作品を見ても既存の思想・方法に留まるものがほとんどであった。1946年に創刊された『赤とんぼ』、『銀河』、『子供の広場』、『少国民世界』などの児童雑誌は、大衆的な娯楽雑誌にも対抗できず、1950年代初頭までに廃刊に追い込まれていく。

従来の児童文学研究では、評論や研究を中心とした1950年代の「童話伝統批判」により戦前・戦中の「童話」の問い直しが行われたことで、新たな思想・方法による「現代児童文学」が準備されたとする。そして1959年に出版された佐藤さとる『だれも知らない小さな国』(講談社)といぬいとみこ『木かげの家の小人たち』(中央公論社)の2冊の長編ファンタジー作品に、「現代児童文学」のスタートが見出されてきた。これは、鳥越信編『はじめて学ぶ日本の児童文学史』(ミネルヴァ書房、2001年)や関口安義編『アプローチ児童文学』(翰林書房、2008年)をはじめとする「児童文学」の通史や概説において、必ず踏襲されている。

ただ一方で、「童話伝統批判」に深く関わり、その後の評論・研究活動をリードしてきた古田足日は、1970年代後半になり「いわゆる少年文学宣言及び、ぼくの『現代児童文学論』に共通のあやまりがあったことである。それは「童話」を死滅するものと考えた点である。今のぼくは、時代の発展につれて新しい表現形態が生み出され、前代の表現形態と共存していくもの、と考えている」(「童話・小説の流れ その問題点」1978年)と述べており、これまでとは大きく異なる見方を表明している。それは1970年代の児童文学において、「童話の系譜」が無視できなくなってきたという状況を反映したのもであった。「童話/現代児童文学」の二項対立的な図式からは、現在の「児童文学」や「YA(ヤングアダルト)」の様相を精緻に捉えることはできない。

児童文学研究者の宮川健郎は、「童話伝統批判」を支えた問題意識の1つに「散文性の獲得」を挙げる一方で(『現代児童文学の語るもの』NHK出版、1996年)戦後まで続く「童話の系譜」についての整理も行っており、戦後の「童話」の書き手として立原えりか、安房直子、斎藤隆介、あまんきみこなどの名前を挙げながら、古田足日による「あまんきみこ」評価の変遷に注目している(『平成17年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「日本児童文学の流れ」』2006年)。しかし、従来から繰り返されてきた「童話/現代児童文学」の二項対立的な図式で捉えているため、抽象的な状況論に終始してしまっている。戦後の児童文学における「童話の系譜」について検討するためには、従来の「童話/現代児童文学」という二項対立を越えて、より広範にジャンルを問い直す視座を確保したうえで、あらためて児童向け読み物が掲載された戦後の雑誌・叢書を研究の俎上に乗せる必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究課題は、戦後の児童文学の特質について児童出版メディアという観点から明らかにすることを旨とする。具体的には、これまで研究代表者が取り組んできたあまんきみこ作品を端緒として、児童出版メディアという観点から「童話の系譜」に含まれる作家たちの作品を再検討し、戦後の雑誌・叢書から「現代児童文学」を捉え直していく。

たとえば、あまんきみこの初の童話集『車のいろは空のいろ』(ポプラ社、1968年)は、童話作家の坪田譲治が主宰する児童雑誌『びわの実学校』に投稿・発表した作品が中心となっている。あまんきみこ作品は、基本的に短編形式をとっているが、1960年代の「現代児童文学」に求められたのは長編作品であった。それでも継続的に作品を発表することができたのは、戦前・戦中期から作品を発表してきた作家たちが中心となって関わった『びわの実学校』(全134号、1963~1986年)や『大きなタネ』(全45号、1960~1982年)あるいはその影響を受けて作られた『どうわ教室』(全6号、1966~1967年)などの同人雑誌が、作品の貴重な受け皿となったからだ。つまり、あまんきみこ作品を研究の中心に据えることで、新たな思想・方法による「現代児童文学」を目指した1960年代の児童書出版の中心的な流れからは離れて、ファンタジー性が強い短編作品という新たな思想・方法による「童話」が誕生する過程を明らかにすることができる。

また、『車のいろは空のいろ』刊行前後の1960年代後半~1970年代は、高度経済成長に支えられた「保育雑誌」や「絵本」などの児童出版メディアの新たな潮流が、あまんきみこの「童話」を抱え込んでいく。児童文学研究者の佐藤宗子は、「「ファンタジー」理念の模索と定着 現代児童文学出版期における『母の友』の役割」(1993年)において、「現代児童文学」のスタートを「保育雑誌」から捉え直そうとするが、むしろ佐藤が分析の対象としなかった1960年代後半の

「保育雑誌」や「絵本」について検討することで、1970年代における「童話」の位置が明らかになってくる。それにより、従来は「童話／現代児童文学」とは分けて考えられてきた「絵本」のテキストについても、議論の俎上に載せることができる。

このように、児童出版メディアという観点から「童話の系譜」の捉え直しを行うことで、従来の「童話／現代児童文学」を越えて、「保育雑誌」や「絵本」などの周辺領域を巻き込みながら、より広範に戦後の児童文学状況について考えることができる点に、本研究課題の学術的意義が見出せる。

### 3. 研究の方法

本研究課題は、児童向け読み物が掲載された戦後の雑誌や叢書を順次検討し、個別の作品分析へとつなげていくため、またなるべく学会・研究会等で発表機会を得るため、期間を4年としている。

児童向け読み物が掲載された戦後の雑誌・叢書を順次検討するためには、資料収集・調査を継続的に行う必要がある。戦後の児童出版メディアにおける雑誌・叢書の収集は、これまで研究代表者が行ってきた研究活動の延長線上にあるため、すでに手元に所有している資料も一定程度活用できる。その他の資料に関しては、古書店などを利用して収集することも予定しているが、大阪府立中央図書館国際児童文学館や国立国会図書館国際子ども図書館などの専門資料所蔵館を利用した調査によって、できる限り補うこととする。特に大阪府立中央図書館国際児童文学館は、書籍の本体のみならずカバーや帯などの付属品も含めて収集しており、編集・出版側の意図を簡便に把握することができるため、叢書を調査する上でも非常に有効である。国際子ども図書館で日常的に行う調査を利用しながら、詳しい調査が必要な資料をリストアップすることで、大阪府立中央図書館国際児童文学館での限られた調査の機会を有効活用する。

### 4. 研究成果

研究初年度である2020年度は、研究代表者が「あまんきみこ作品初出一覧（1965～1974年）」（『あまんきみこ研究会会報』第1号、2018年）で明らかにした児童出版メディアと「童話」の関わりを踏まえて、1960年代後半以降のいわゆる「保育雑誌」に注目し、国立国会図書館東京本館や国際子ども図書館等を利用して資料調査を行った。具体的には、「童話の系譜（宮川健郎）」に連なる作家たちの作品発表の状況について、当初予定していた『母の友』や『こどものとも』（ともに福音館書店）を中心に整理し、すでに目次等を作成していた『びわの実学校』や『大きなタネ』などとともに、個別の作品を検討する準備を進めることができた。

また、児童文学の評論・研究の最新の動向についても検討を行い、2019年に刊行された目黒強『児童文学の成立と課外読み物の時代』（和泉書院）、今田絵里香『「少年」「少女」の誕生』（ミネルヴァ書房）、村山龍『宮澤賢治という現象 戦時へ向かう一九三〇年代の文学運動』（花鳥社）などを踏まえて、戦前・戦中期の「童話」に対する見方・考え方を更新することができた。その成果の一部は、『日本児童文学』（日本児童文学者協会）に寄稿した。

さらに副次的な成果として、児童文学研究や日本文学研究の手法を踏まえて、東京都立産業技術高等専門学校における一般選択科目「課題研究」の指導方法を確立することができた。それらの成果は、2件の口頭発表（共著）に結実した。

研究2年目となる2021年度は、前年度の資料調査を踏まえて、児童文学や絵本の叢書を具体的に選定して調査を継続した。それらの成果の一部は、日本児童文学学会第60回研究大会での研究発表「1970年代のあまんきみこ作品考 児童出版メディアと「童話」のゆくえ」に結実した。従来の児童文学評論や研究で捉えにくかった出版メディアの問題が、児童文学作品にも現れていることを確認するとともに、同時代の児童文学評論と一定の距離を保ちながら展開された、あまんきみこ作品の「長編化」の試みについて検討を行うことができた。

また児童文学作家・評論家である古田足日の幼年童話論が、同時代の出版メディアの問題を含みながら展開されようとしていたことに注目し、古田足日を中心とする同時代の追加調査を国立国会図書館東京本館で行い、論文投稿の準備も進めることができた。

そして年が明けてからは、大阪府立中央図書館国際児童文学館へ出張することが叶い、1940年代から1970年代までの「幼年童話」に関連する児童文学や絵本の叢書について網羅的な調査を行うことができた。国際児童文学館では、2021年度より「特別研究者」として、資料調査と研究成果の公開を円滑に行う準備も整えることができた。

さらに副次的な成果として、戦後の児童文学叢書や検定教科書における文学作品の扱われ方などを踏まえて、『日本の文学者36人の肖像』（全2巻、あすなろ書房）や、高等学校国語教科書『新言語文化』（三省堂）とその指導書の執筆も行った。新刊の児童書についても継続的に調査しており、書評も執筆した。

研究3年目となる2022年度は、前年度の調査研究の成果を論文にまとめるとともに、引き続き児童文学や絵本の叢書や雑誌を対象に調査研究を行った。前者については、「ある日ある時」に「中国の大連」が語るもの 『あるひあるとき』（あまんきみこ文・ささめやゆき絵）論

」(『国語教育史研究』)、「『あるひあるとき』論の余白に 絵本・「ひとしづく」・資料調査」(『あまんきみこ研究会会報』)の計2本の論文に結実した。後者については、大阪府立中央図書館国際児童文学館での資料調査を計3回行うことができた。特に戦後直後から1970年代頃までに、坪田譲治や与田準一が関わった叢書や雑誌を網羅的に調査することで、出版メディアから見た戦後の児童文学の流れを捉えることができ、論文投稿の準備を進めている。また新潟県上越市でのイベント「未明生誕140周年記念シンポジウム」などにも参加しながら、戦前・戦中期の関わりについても検討を始めている。

これらの資料調査に先立って、日本児童文学学会第61回研究大会でのシンポジウム「現代児童文学をいかに歴史化するか 資料の保存・活用の方策を考える」に登壇し、発表や議論を通して調査研究の進め方について示唆を得ることができた。その成果は「あまんきみこにとって「資料」とは何か 「現代児童文学」を語るために」(『児童文学研究』)として論文にまとめることもできた。

その他の成果としては、『日本の文学者18人の肖像【現代作家編】』(あすなる書房)において、「あまんきみこ」や「江國香織」などの項目を執筆した。また戦後の児童文学叢書や検定教科書における文学作品の扱われ方などを踏まえて、高等学校国語教科書『新文学国語』(三省堂)とその指導書の執筆も行った。

最終年度である2023年度は、前年度までの調査研究を踏まえて、学会発表やシンポジウム、公開インタビューなどを行い、研究成果を広く公開・還元することができた。「『びわの実学校』は「現代児童文学」を語るか 《童話の柱》を視座として」(日本児童文学学会2023年度6月例会)では、1950年代に「童話伝統批判」が展開される一方で、児童出版メディアにおいて坪田譲治や与田準一が果たした役割を整理し、あまんきみこが《童話の柱》となっていく過程について、新発見資料も踏まえながら明らかにすることができた。また「「車のいろは空のいろ」はなぜ「更新」されたか 「三巻本」と「四巻本」の成立をめぐって」(シンポジウム「更新された『車のいろは空のいろ』全4冊をめぐって」、あまんきみこ研究会第11回研究会)では、戦後児童出版メディアにおいて50年以上に渡って刊行を続けてきた、あまんきみこの「車のいろは空のいろ」シリーズの「改稿」について、一部の作品が国語科教材となったことを踏まえつつ、「童話」が「昔話」のような側面を強化していく過程を分析するとともに、他の登壇者や参加者と討議を行うことで、問題意識を広く共有することができた。さらに「詩と絵本のことば 林木林さんに聞く」(日本児童文学学会第62回研究大会)では、絵本作家への公開インタビューによって、現代の児童出版メディアにおける「絵本」の制作・出版過程の一端を明らかにするとともに、「絵本のことば」の特性についても理解を深めることができた。

研究期間全体を通じて、戦後直後から1970年代半ばごろまでの児童向け雑誌・叢書への坪田譲治や与田準一の関わり、そしてあまんきみこに注目することで、「童話伝統批判」を受けて成立したとする「現代児童文学」においても、「童話」が受け継がれていく過程を明らかにすることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮田航平	4. 巻 23
2. 論文標題 「ある日ある時」に「中国の大連」が語るもの 『あるひあるとき』（あまんきみこ文・ささめやゆき 絵）論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語教育史研究	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮田航平	4. 巻 56
2. 論文標題 あまんきみこにとって「資料」とは何か 「現代児童文学」を語らうために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 児童文学研究	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮田航平	4. 巻 3
2. 論文標題 『あるひあるとき』論の余白に 絵本・「ひとしづく」・資料調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 あまんきみこ研究会会報	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮田航平	4. 巻 66(3)
2. 論文標題 来たるべき「児童文学」のために 「評論・研究」の現在、そして未来	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本児童文学	6. 最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮田航平
2. 発表標題 『びわの実学校』は「現代児童文学」を語るか 《童話の柱》を視座として
3. 学会等名 日本児童文学学会2023年度6月例会（武蔵野大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮田航平
2. 発表標題 「車のいろは空のいろ」はなぜ「更新」されたか 「三巻本」と「四巻本」の成立をめぐる （シンポジウム「更新された『車のいろは空のいろ』全4冊をめぐる」）
3. 学会等名 あまんきみこ研究会第11回研究会（玉川大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 林木林、宮田航平
2. 発表標題 詩と絵本のことば 林木林さんに聞く
3. 学会等名 日本児童文学学会第62回研究大会（武蔵野大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮田航平
2. 発表標題 あまんきみこにとって「資料」とは何か 「現代児童文学」を語るために （シンポジウム「現代児童文学をいかに歴史化するか 資料の保存・活用の方策を考える」）
3. 学会等名 日本児童文学学会第61回研究大会（宮城教育大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮田航平
2. 発表標題 1970年代のあまんきみこ作品考 児童出版メディアと「童話」のゆくえ
3. 学会等名 日本児童文学学会第60回研究大会（大阪府立中央図書館）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田宏、宮田航平
2. 発表標題 一般科目におけるリベラルアーツとしての課題研究 化学系と国語系の展開
3. 学会等名 日本工学教育協会第68回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田宏、宮田航平
2. 発表標題 一般科目におけるリベラルアーツとしての課題研究の取組み 化学系の実践を中心に
3. 学会等名 日本化学会第101春季年会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 宮川健郎、佐藤秀明、藤本恵、宮田航平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 あすなる書房	5. 総ページ数 80
3. 書名 日本の文学者18人の肖像【現代作家編】	

1. 著者名 宮川健郎、大木葉子、中地文、羽矢みずき、疋田雅昭、藤本恵、宮田航平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 あすなる書房	5. 総ページ数 77
3. 書名 日本の文学者36人の肖像（上）	

1. 著者名 宮川健郎、大木葉子、中地文、羽矢みずき、疋田雅昭、藤本恵、宮田航平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 あすなる書房	5. 総ページ数 80
3. 書名 日本の文学者36人の肖像（下）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------